分陀利華

第384号（令和２年12月１日㈫発行）
発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

上品の懺悔とは、身の毛孔のうちより血を流し、眼のうちより血出すをば上品の懺悔と名づく。（中略）流涙・流血等にあたはずといへども、ただよく真心徹到するものは、すなはち上と同じ。
（善導『往生礼讃』）

やばい、尊い

法学部准教授　西　義人

やばいエッセイ

むかしむかし、「やばい」という言葉には肯定的な意味がありませんでした。若い人には実感がないかもしれませんが、『日本国語大辞典』「やばい」の項には今でも「危険や不都合が予測されるさまである。危ない」という意味だけが出ています。伝統的にはこの意味に限られるのです。それが現在では「これうちの犬の写真」「え、やばい」という会話が聞こえてきても、牙をむいている猛犬ではなく可愛い犬の写真を見せているのだろうと普通に予想できるほど、肯定的な使われ方もおなじみになりました。

そんな「やばい」が浄土真宗のお話で使われているのを見たのは十年ほど前のこと。シンガーソングライターで浄土真宗僧侶の二階堂和美さんの「歌はわたしのなんまんだぶつ」と題されたエッセイの一節でした。

日々の暮らしに忙しい私たちは、「なんまんだぶつ」と念仏を称えるぐらいしかできない。それさえ怠ける。あるいは背く。それでも仏の慈悲の光は、生きとし生ける命みんなに等しく降り注いでくださっているのです、と聞かせてもらうと、私なんか、感覚的にビューンと涙がでるほど嬉しくなってしまうのです。ばかみたいですが。「私ばかだな～」というのが浄土教の教えなのかなとも思っている。こんな解説の仕方をしていたら偉いお坊さんに怒られそうです。（中略）私たちはいくら修行を積んだところで、煩悩を捨てることはできない、煩悩だらけの私たちをそのまま、舟に乗っけて浄土に連れて行ってくださると説かれているのです。やばくないですか、優しすぎて。逆にこれを疑わずに乗るほうが難しい。

（二階堂和美『しゃべったり　書いたり』、編集室　屋上、八四～八五頁）

偉くないお坊さんの私は怒るどころか、いやらしい話ですが少し嫉妬してしまいました。浄土真宗の教えのいちばん大切なところを、こんなに易しく温かくリズミカルに表現することができるのかと。そして、「やばくないですか」の絶妙さ。うわあ、こんな言い回しされちゃったらもう、やられたなあと、乏しい語彙で唸るばかりでした。でも考えてみればあちらはたくさんの歌を作ってこられたプロ中のプロ。感性や言葉を磨く努力もしていない者にはうらやむ資格もありません。素直にありがたく味わわせていただきましょう。そんなことを思って今に至っているわけです。

「やばい」と「難しい」

「やばくないですか」がこれほど響いたのは、そのフレンドリーな語感もさることながら、「やばい」という言葉の二重性が、浄土真宗の教えの特徴に実によくフィットしていたことが大きな要因だったのではないかと思うのです。

浄土真宗の教えは「難信」、つまり信じることが難しい教えと表現されます。そして、その「難信」には大きく二つの意味があるとされています。

ひとつは、文字通り、信じることが難しいという意味。これは、「私が」納得して信じるとか、「私が」しっかりと確信するというような、一般的な意味で「私が信じる」ことが難しいということです。「この教えは、煩悩を持ったままで、煩悩を完全に離れた仏になれる教えです」と聞いても、私の納得や確信を求めるのであれば、「そんなわけあるか。矛盾している。証拠もない」というように、到底信じることはできません。そうではなく、「理屈はいいからこの阿弥陀仏にまかせなさい。大丈夫」という願いを聞いて、「あっはい」とまかせることが、浄土真宗の信なのです。「信じる」というより「信じさせられる」。信じる努力など何も要らない教えであるから、私の側から信じようとすると、かえって難信になるのです。

「難信」のもうひとつの意味は、この教えがきわめて尊いことをあらわしているというものです。なぜきわめて尊いのかといえば、先に説明した通り、「信じる」のではなく「信じさせられる」教え、救われる側の努力をまったく必要とせずにあらゆる者を平等に救うすごい教えであるからです。

このことを学んだ当初、「難」に肯定的な意味があるということが感覚的にしっくりきませんでした。結論ありきの強引な解釈なのではないかとも思いました。ですが、阿弥陀仏の救いが「やばい」と表現されているのを見て、もしかしてこういうニュアンスだったのかなと腑に落ちたんですね。

改めて二階堂さんの文章を読んでみると、「やばくないですか、優しすぎて。逆にこれを疑わずに乗るほうが難しい」と、実はしっかり難信という文脈になっています。もしかしたら「難信」と同様の二重性を持つ言葉であることまでも意図して「やばい」を使用されたのかもしれません。やばいです。

これよりやばいことはない

そんなことを踏まえつつ、親鸞聖人が「難信」について詠んだ和讃を味わってみましょう。

**一代諸教の信よりも弘願の信楽なほかたし
難中之難とときたまひ
無過此難とのべたまふ**
（註釈版聖典、五六八頁）

「一代諸教」というのは、釈尊が一生の間に説かれたすべての教え（浄土真宗を除く）のこと。そして「弘願の信楽」というのは、煩悩だらけの私をそのまま仏にしてくれるという阿弥陀仏の願い（第十八願）を信じること、つまり浄土真宗の信心のことです。

（現代語訳）
釈尊が説かれたすべての教えを信じるよりも、第十八願の真実の信心を得ることはなお難しい。これはもっとも難しいことであり、これより難しいことは他にないと説き示されている。
（『浄土真宗聖典　三帖和讃　現代語版』、四三頁）

この「難しい」を、思いきって「やばい」に置換して読んでみましょう。親鸞聖人がこの和讃にこめた感覚を、時代を超えて共有することができる、かもしれませんよ。

大学若手職員からのメッセージ
⑥伝えたいこと

「過去を振り返って、『あの時があって良かった。』そう思えて、人に話す日がきっとくる。」

ほんの30年生きてきただけですが、私はここで、常に自分を支えてくれるこの言葉に出会いました。

私は一度転職しています。前職は大学卒業後すぐに入社し、右も左も分からず戸惑いの多い毎日でした。学生時代にアルバイトをほとんどしたことがなく、働くということに対するイメージを持てないままで、今考えると、学生気分がなかなか抜けなかったのだと思います。一方、規則に身だしなみについての記載があるくらい、その会社では常に高い社会人意識を持つことが求められていました。当時は、このギャップを前に何をどうしたら良いか全く分からず、先輩方には相談するどころかその厳しさに委縮してしまい、研修期間中から毎日毎日泣いて過ごしていました。

転職を決意したのは、ある日、涙が出なくなってしまったからです。心を守るため感情に蓋をしたと感じた時、「このままでは嫌だ、毎日笑顔で過ごしたい。」と思いました。

仕事を辞めた時、人生最大といっても過言ではないほどの挫折感を味わい、社会の中で働くのは向いていないのではないかと思ったことさえありました。しかし、たくさんの方々に支えていただき、ご縁あって現在に至ります。

それでも、再び働き始めたころは新しいスタートを切った喜びより、また失敗したらどうしようという不安の方が大きかったです。そんな時に、ある方から冒頭の言葉をかけていただきました。その時はあまりピンとこなかった。でも、きっとそうなると信じることで、じゃあ、今はもう少し頑張ろうと思えました。今の私は「あの時」からの積み重ねです。あの時、あの会社に入って良かった。自分が生きていくうえで本当に求めるものが分かったから。今、あの挫折感はもうほとんど感じられません。また、あの時、拙い話を聞いてもらえて良かった。自分が生きていくうえで大事なものを教えてもらえたから。

それに、私は今こうしてあなたに自分の経験を話すことができています。本当にあの言葉通りになりました。私なりに言い換えれば、「今まで起きた事は全部、それで良かったと思える日がきっとくるから、大丈夫。しんどい経験は、将来、絶対に誰かの力になれる。」私がもらった大事な言葉、少しでも記憶に残していただけると幸いです。

（教務部　学部事務課　佐藤　里弥）

澪標

浄土真宗では親鸞聖人のご恩に報いるため、聖人の命日を中心に報恩講が営まれています。本学園でも毎年十一月初旬の土曜日に学園講堂で勤修されています。

親鸞聖人は六十三歳のころ、関東から妻の恵信公や子どもたちと共に京都に戻られています。帰洛後は、主著『教行信証』をはじめ、多くの聖教を執筆されました。そして聖人は弘長二年（一二六三）（旧暦では十一月二十八日、新暦では一月十六日）に、三条富小路にあった聖人の弟尋有の坊舎（善法坊）で、午時（昼の十二時頃）に九十歳で往生されました。

報恩講という名称が使用されるようになったのは、第三代覚如上人の時代からです。永仁二年（一二九四）、覚如上人は二十五歳の時に、親鸞聖人の三十三回忌法要に当たり、『報恩講私記（式）』という書物を著されています。この書物は聖人の遺徳を讃えたものです。『報恩講私記（式）』が著されて以降、聖人の御正忌法要（命日に営まれる法要）を報恩講と呼ぶようになりました。

浄土真宗の各派では聖人の忌日までの七日間に、報恩講が営まれます。本願寺派では、新暦によって一月九日から十六日までの七日間勤められます。

報恩講は地域によっては、本願寺よりも早く勤めることから「お取り越し」とも呼ばれています。私の育った地域にも、本願寺直属の寺院（別院）があって、毎年「お取り越し」が勤められていました。門前には沢山のお店が出て、買い物やゲームを楽しむ人達で賑わっていました。（普）

在職四半世紀を振返る

発達教育学部教授　富村　誠

板面に残るカエルの跡。着任最初に授業をしたC412教室の黒板には、平成7年以降に幾度となく描き表した学習キャラクター・カンガエルの跡が残っています（柔らかさで定評がある羽衣チョークを使用しても食い込む筆圧であったと思われます）。

教員免許更新講習等の場で出会う卒業生諸姉から「富村先生」ではなく「カエル先生」と呼ばれることが多い私ゆえ、定年となる本年にご縁をいただいた本稿は、「在職四半世紀を振返る」と題して記します。

真面目力の学生の姿

私が本学園に奉職した平成7年4月は、阪神淡路大震災の影響で諸事に不便さが多かった時期です。

交通機関の不通、自宅の損壊等により、京都東山まで相当の労力と時間を費やして集ってくる学生たち。授業の少ない曜日には被災地でのボランティア活動に精励しながら出席している学生たちも多く、前任・広島大学附属東雲小学校での17年間に出会った児童に通底する、物事に真摯に取り組もうとする態度、当たり前のことを当たり前に為すことができる真面目力の豊かさに感動する日々でした。

「最近の若者は…」という苦言がピラミッドの内部壁面に落書きされているとのことですが、出会わせていただいている京女生は真面目力に満ちた、「素敵な若者」です。

私は、学生が教員になった際に役立つように丁寧な板書に心してきました。パワーポイント画面の記載内容を資料として配付する形態が多くなった近時でも、板書を中心とした講義をすすめてきていました。配付資料を「読む」よりも、自ら「書く」方が主体的な学修法であり考える場を保証する言語活動であるからです。学生たちのノートづくりは実に見事で真面目力を発揮した力作・秀作が目立ちます。

「丁寧に、板書以外の説明まで書き留めていますね」と褒めると『病気で休んでいる友だちが見ても分かるように…』と話す学生の姿、『アカデミック・スキル』で1回生時に学修した「スペースには余裕を持つ」ポイントを活かして事後に用語説明等を書き加えている学生の姿に感動することもありました。

書く活動は読む活動よりも、手間も時間もかかる面倒な活動です。その面倒さに挫けることのない、真面目力に満ちた学生の姿を振り返ると、確かな手ごたえを感じることができます。素敵な学生と出会えたことに感謝するとともに、その姿が今後とも引き継がれることを念じます。

連携に汗する職員の姿

私は、平成18年から短期大学部長、引き続いて教務部長、学生部長と、大学の部長職を平成25年まで務めさせていただき、平成26年からは附属小学校長を兼務させていただいて今日に至っています（同年4月から1ケ月半は学長代行を併せて務めました）。

在職年数の半分を超える長期間に亘る多彩な部局での日々を振り返ると、学生・児童のため連携に汗する職員の方々の、同質異形の姿がありました。

短期大学部教育課程の魅力を増進する初等教育学科への保育士養成課程設置にかかる申請、履修上限単位設定やGPAをもとにした厳格な成績評価実施を伴う大学教育課程の改革、新寮新築や改築を前に何かと苦情が寄せられていた旧学生寮にかかる保護者・学生への対応、創立60周年記念教育研究発表会と「授業を語る会」の開催、そして、今般の現在も引き続いている新型コロナウイルスに対応した新しい生活様式での小学校教育の推進等、異なる部局での、額に汗する職員による同質の連携の姿です。

学生・児童の教育・研究環境を整え向上させていくことは学校法人に職を得ている以上、当たり前のこととは言え、その質保証には、通常勤務を超える労力と時間が必要です。

例年にない積雪の中を保育実習施設の内諾をいただきに出向く際に同行くださった。幾度もの教育課程WG（ワーキンググループ）での事務局を務めてくださり、会議毎に膨大な検討資料を用意くださった。旧学生寮でムカデやゴキブリ等が出たとの連絡を受けてガムテープを手にして駆け出してくださった。大学の部長職としての日々では、教員と職員との連携に汗する尊い姿に学ばせていただきました。

また、附属小学校長としての日々では、例えば、授業公開に向けての研究授業、学習指導案の検討・作成に向けた協議に努める姿、また、時差を設けた登下校時にコロナ禍を避けるため自家用車で送迎する場を安全に保つことができるようグラウンドでの誘導に汗する尊い姿に学ばせていただきました。

走馬灯の如く思い浮かぶ職員の姿からは、当たり前のことを当たり前に為すことができる京女生と通底するものを見出すことができます。いや、本来的に言えば、このような連携に汗する職員の雰囲気が、学生・児童に反映され、京都女子学園のカラーとして輝いているのだと思われます。その雰囲気が今後とも引き継がれていくことを念じます。

京女は共助＊共生の要

在職四半世紀をフリカエルと、京女は共助、共に助け合う雰囲気に満ちた学園であると気付かせていただいた次第です。

「人」は人と人との間柄において『人間』となることができるだけに、『他者と共に生きることができる人間としての力』の基盤としての共助の心は、共生の要となる人間力のひとつです。自分の思い通りにならないことで他者を恨んだり争ったりする煩悩具足の凡夫であるからこそ、泥沼に咲きながら泥に染まらず泥沼を荘厳する芬陀利華の如く生きようとすることが大事です。

共生の要・共助の心に満ちた学園に在職させていただいてきていることに感謝し、本稿を閉じさせていただきます。お読みくださり有難うございました。

法のことば

上品の懺悔とは、身の毛孔のうちより血を流し、眼のうちより血出すをば上品の懺悔と名づく。（中略）流涙・流血等にあたはずといへども、ただよく真心徹到するものは、すなはち上と同じ。

（善導『往生礼讃』）

仏弟子として守るべき戒や、教団の規則である律などを破ってしまった人は、罪に応じて「懺悔」をしなければなりません。懺悔は心から罪を恥じ悔いることです。懺悔にはレベルがあって、レベルの高い懺悔では全身の毛穴や目から流血しながら懺悔するとされています。どうやってもできそうにありません。

ところが、阿弥陀仏から与えられる真実の信心には、その懺悔と同じ価値があるというのです。反省するといっても血はおろか涙すら出てこない、出てくるのは自分は悪くない仕方がないというため息がせいぜいの私のことを見通して、仏弟子として必要なことを何から何まで用意して与えてくれるのが阿弥陀仏なのです。

（西　義人）

仏典随想

『相応部経典』「悪魔相応」

上野　隆平

釈尊の悪魔との闘いは、成道前にかぎらず、成道後も絶えず行われていた。パーリ『相応部経典』「悪魔相応」に見える一群の経典には、その模様が詳しく説かれている。そこには後の大乗仏教において超人化される釈尊とは別の、人間釈尊の生のあり方が色濃く保存されている。

『相応部経典』は南方上座部に伝わる初期経典の一つで、分量の短い経典をテーマ別に配列した短編経典集である。「悪魔相応」はその『相応部経典』に収録される、釈尊と悪魔とのやり取りを描いた全二十五経の総称にあたる。そこに登場する悪魔は、パーリ語の「マーラ」を原語とする仏教の悪魔であり、サタンやデーモンなどの西洋の悪魔とは性格が異なる。マーラは直訳すると「殺す者」であるが、その意味するところは人間釈尊の心中に出没する苦しみを生むもと、つまり煩悩である。

「悪魔相応」に見える釈尊と悪魔のやり取りは全て成道後のものであり、これにより釈尊は悟りを開いた後も自らの心中に沸き起こる、それが原因となり苦しみが生じる様々な欲求と闘っておられたことが分かる。ただし、成道後の釈尊が凡人と違うのは、苦しみが生じる原因となる、それら諸々の欲求の正体を完全に見破っておられたことにある。そのことは全二十五経の大半に見える経末の定型句が次のように述べるところに明らかである。

「尊師はわたしのことを知っておられるのだ。幸せな方はわたしのことを知っておられるのだ」と気づいて、打ち萎れ、憂いに沈み、その場で消え失せた（中村元『ブッダ　悪魔との対話』一四頁他）。

＊　＊　＊

私はこの経を読むまで、釈尊の悪魔との闘いは成道前にかぎられ、成道後は弟子達の指導にだけ専念しておられたと考えていた。しかし事実は恐らくそうではない。

釈尊は悟りを開いた後も絶えず自らと闘っておられたのである。自身を欺き誑かそうとするもう一人の自分と。それが他ならぬ悪魔の正体だったのである。私はそこに悟りを開くことが決してゴールでないとする後の大乗仏教の原点を見る思いがする。

シリーズ　智慧の蔵㉞

『異教の隣人』

釈徹宗＋毎日新聞「異教の隣人」取材班　晶文社　二〇一八年

『異教の隣人』。そのタイトルに心を惹かれる。毎日新聞での連載記事をまとめた本書は、宗教学者であり僧侶でもある釈徹宗氏と、毎日新聞の取材班が関西エリアを中心に、さまざまな信仰の現場を訪ね歩き、まとめられたルポである。

目次を開けるとイスラム教、ユダヤ教、ヒンドゥー教といった、なじみある外国の伝統宗教の名前が並ぶ。ジャイナ教、シク教、正教会、ベトナム仏教といった、あまりなじみのない名前もズラッと並んでいる。

私たちの社会では、多様な信仰を持つ人たちがすぐ近くに暮している。しかし近くに住む私たちは、その人たちの存在を自覚し、その人たちが大切にしているものをどれほど理解できているだろうか。

現代社会は、すぐ近くに異なる信仰を持ち、異なる生活様式を大切にしている人が暮らす社会であることを自覚しなければ、無意識のうちにその人たちを傷つけてしまう、と釈氏は警鐘を鳴らしている。無自覚からくる些細なトラブルが、偏見や差別や排除へとつながるので、互いに敬意をもって折り合っていかねばならないと。

本書の中で釈氏と取材班は、大阪府茨木市の住宅街にある「大阪茨城モスク」を訪ねている。そこでは定期的な礼拝とともに、イマーム（導師）から子ども向けのクルアーンの講義が行われたり、タブレット端末やスマホに入ったクルアーンを読み上げる大人向けの講義が行われている。授業が終わると、持ち寄った手料理を囲みながら、和気あいあいと夕食会がひらかれる。この場所を通して、信仰と文化が継承されていくのだ。

宗教施設や宗教コミュニティーは、信仰だけではなく、文化や食の記憶アーカイブとしての役割も果たしている。異教の隣人にとって、日本での生活は教育や食事に関する問題が山積しているが、この場所にアクセスすれば自国のルーツや文化、言葉、食事、生活様式などを学び、自身のアイデンティティーを確認することができる。まさになくてはならない場所となっているのだ。

そこで繰りひろげられる喜怒哀楽の日々の光景は、私たちと何ら変わらない営みである。先入観をはがし、私たちはまずその事実から知る必要がある。

異教の隣人と互いに尊重しあいながら暮らす社会の実現。そこへ私の背中を押してくれるお勧めの一冊である。

（赤井　智題）